

「解放の学力」論の考案者・中村拡三  
(なかむら・こうぞう, 1923-2002)の思想形成  
—昭和戦後期の紀伊半島における  
林業の変化との関係—

岡本 洋之(兵庫大学)

大阪市立大学教育学会第8回大会発表

(於・同大学学術情報総合センター)

**2018/12/ 1**

## ◆要約◆

戦後日本の同和・解放教育における理論的指導者の一人であり、「解放の学力」論を考案した中村拓三は、1955（昭和30）年に和歌山県新宮市の被差別部落を調査し、同年のうちに奈良県吉野郡中荘村で小学校教員となる。

戦後の林業の変化のなかで、経済成長から取り残された両地域を見つめた彼の経験をふまえると、「解放の学力」論がつくろうとした人間像は、特定の地域ではなく、いかなる場所、いかなる環境でも、自分の生活と社会の姿を正しく見つめ、社会に働きかける運動をできる人間であったといえよう。

またこのような学力を身につけることは、一種の初等（中等）教育版教養教育といえるから、教える者にはもちろん、学ぶ者にも能力に応じた教養が求められる。その背景には、中村が長野と京都で教養を修得してきた経験があるのであろう。

## 1. 本研究の目的と方法

中村拓三は、戦後日本の同和・解放教育における理論的指導者の一人であり、「解放の学力」論を考案した人である。

この教育は、集団主義教育を基調として、差別のために「荒れた」子どもたちの生活を正し、就職・結婚等の際に直面する差別をはじめ、貧困、家庭内暴力等の問題の根源が差別に由来することを自覚させ、子どもたちを差別と闘うよう立ち上がらせていくものであった。

### (解放教育の実践の一事例)

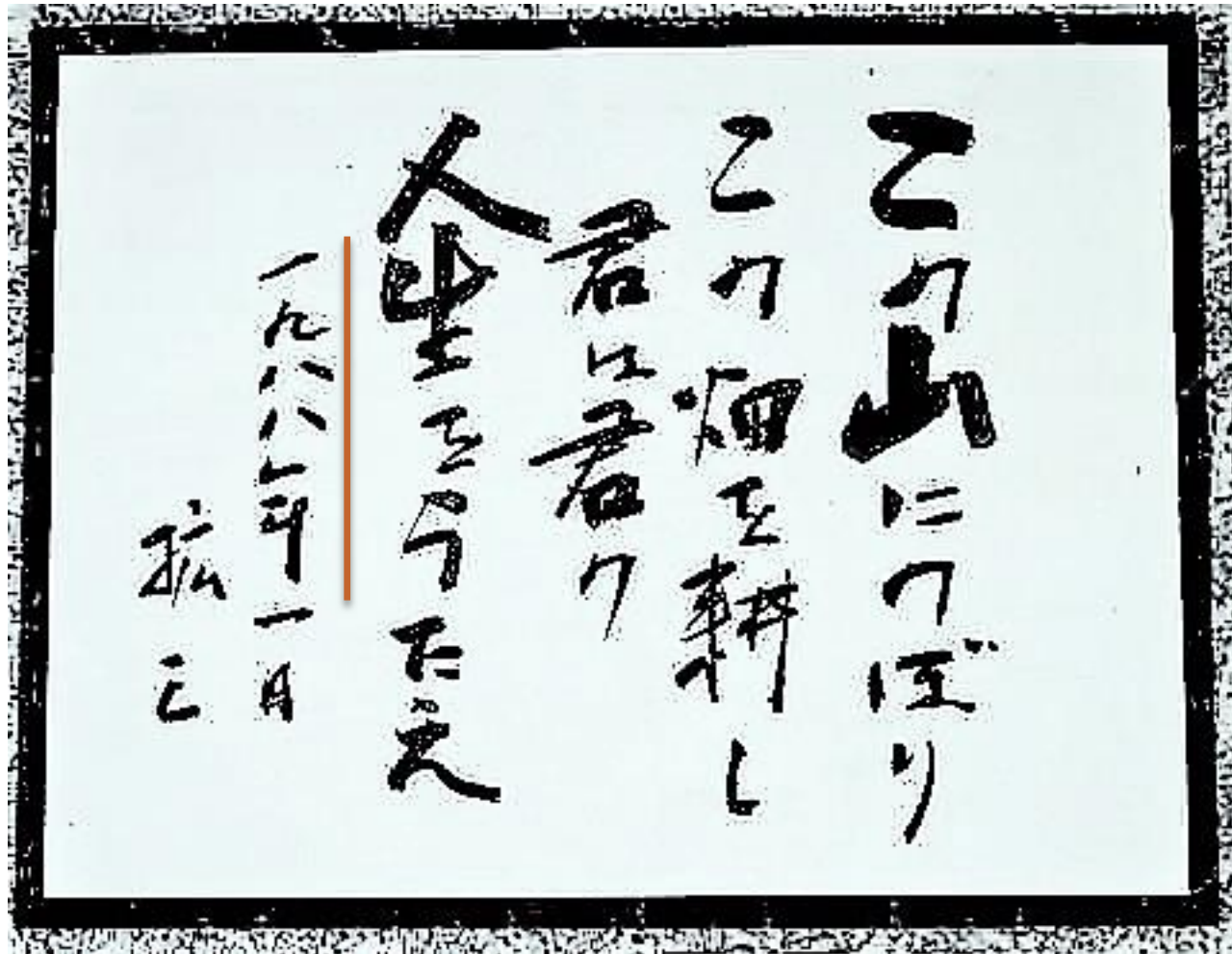
「指導し切らんで、ヤクザになったもんもおったけど、ワシらも必死やった。タバコでも、自販機ごとパクってくる奴もおった。それで指導のために家に乗り込んだら、二階の衣装棚の中に隠れとる。親も手がつけられんくらいのワルや。この時の教頭も大した奴で、その生徒を二階の階段から背中押してダダダッと落としておいて、その上から飛び蹴りして叩きのめした。えらい騒ぎやったから、近所の人らもびっくりして『あんたら何ですのんッ』て文句言うてきたから『すんまへん、こいつの身内ですねん』って言うて切り抜けた。今やったらもちろん大問題やけど、これはその生徒の生活を知ってるからできたことや。本来やったら警察に電話すれば済むことかもしれんけど、警察には電話せん。家庭も荒れとるから、鑑別所いっても更生なんかでけへん」

(1980年代に大阪府松原市立松原第三中学校長を務めた北山貞夫の話。上原, 2014年, 74-75頁)

このような実態のもとでは、一人ひとりの子どもたちに多様な進路・人生設計を認め、それをかなえるように指導することなど、遠い先の話だと考えられたことであろう。

しかし発表者は、同和・解放教育指導者のなかでは中村 拡三が、状況が許すようになれば子どもたちに多様な人生設計をさせ、個性を伸ばしたいと考えていたのではないか、という仮説をもっている。

12/2018 OKAMOTO H



中村が晩年に現・兵庫県宍粟市に開いた合宿施設  
 「奥海（おねみ）生活学校」に掲げた額

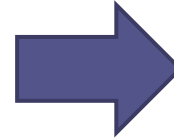
<http://kobe-kodomo.jugem.jp/?day=20110814> (2018/10/25確認)

またその基盤として、大正デモクラシー期に彼の故郷・長野県で花開いた、教養を楽しむ風潮があったのではないかと発表者は考えている。

本発表は、レッド・ページによって長野県の教職を追われ、関西地方に流れてきていた彼が、1955（昭和30）年ごろ、単に社会的・経済的差別の撤廃を目指すだけでなく、教養としての知をもとようと努めていたこと、そしてその姿勢から、社会に対する彼の姿勢を読み取ることを目的とする。方法としては、彼の「解放の学力」論を、このころの社会の動きと重ね合わせて考える。

## 2.中村に関する先行研究と本研究の関連 板山（2013年）によると…

1950年代  
学校教育による  
「部落／部落外」双方の子どもの変革



1960年代  
学校外の部落の子どもの運動体である「子ども会」を基盤とした、  
部落の子どもの「解放の主体形成」

両期間を通じ…

- (1)生活綴方的教育によって子どもたちに生活実態を見つめさせ、そこから社会矛盾に気づかせる（解放の自覚）。
- (2)狭い個人・人間関係レベルの問題を、広い社会関係の問題へとつなぐ意味で「社会関係のあり方や自然の法則を身につける教育」を行う（教科指導）。
- (3)部落の子どもがもつ、社会の不正に対する「抵抗感」（中村の造語）に共感した部落外の子どもが自分の差別意識を克服し、両者が集団の中で生活そのものを高めていくような教育を行う（集団づくり）。



本研究では、中村のこのような教育観が、1955（昭和30）年に和歌山県新宮市で行った被差別部落の調査と、奈良県吉野郡における教員生活に影響されて形成されたのではないか、という問いを立て、両地域における戦後経済の動き、とくに林業を取り巻く環境の変化をふまえてそれを解きたい。

### 3.安易に将来の展望を見出せない地に身を置いた中村

#### a. 和歌山県新宮市での被差別部落の調査



<https://minkara.carview.co.jp/userid/1995869/blog/c923332/>  
(2018/10/25確認)

1955（昭和30）年に中村は部落問題研究所の一員として、新宮市の被差別部落と教育の実態に関する調査を行った。

この調査では、

- ・多くの家庭の経済的貧困、
- ・そのなかで子どもたちが市内の製材所に木くずを拾いに行く「薪集め」のため登校できない現実、
- ・経済的・時間的余裕がない親の生活からくる家庭内での不和と暴力、
- ・親が家を空けている間に子どもが集団をつくって街を徘徊する現実等

が明らかになった。

また子どもたちの作文からは、「学習に不熱心な子どもでも、[親に対し]内部にもえるような怒りをもっている」ことが明らかになった。

「多くの子どもたちは、貧困のために薪をぬすみにゆき、また家庭が破壊されているなかで、その人間性をすっかり歪められてきている。だがそれにも屈せずのにびている子どもたちがいることも事実である。その家庭は、いわば『教育に理解のある家庭』であるが、この理解というものは何であるのか」。

中村らはこれを討議した結果、望ましい親の生き方は「子どもと共に悩み、語り、共にのびようとする」ものであり、それが子どもたちの怒りを「社会に対する批判と抵抗として育ててゆく」のだと小括し、そこから

「何よりも正しい解放運動をすすめなければならないであろう。解放運動とは、ゆがめられた社会関係に対する抵抗以外の何物でもないからであり、それは当然、親たち自身の間人変革をともなわないではない。この解放運動＝人間変革が一方では、子どもたちの教育を前進させ、他方では、子どもたちに学用品を与え、教科書を与え、やがて、子どもたちの薪拾いをも解決してゆく道である」という結論に達する。

このように中村は、「正しい解放運動を」という結論を出した。しかし彼は、それをまとめた文章「同和教育のゆきづまりは何か―新宮の調査から学ぶこと―」を、単に運動に結集せよというプロパガンダにしていない。

まず冒頭の章「新宮というところ」では、かつて木材の一大集積地として新宮市の果たした役割が、1952-54（昭和27-29）年に急速に衰退していることが、新聞記事から統計を引用して丁寧に示され、この役割が奈良県吉野川流域に奪われていると述べられている。あわせて、かつて当地の人々が「関西の江戸っ子」と呼ばれたことや、戦前に熊野川の筏師たちが鴨緑江にまで遠征したことにも触れられているのは、さながら教養講座のようである。

## (中村, 1973年, 90-91頁)

しかし、新宮がかつて木材によって栄え、木材に結ばれてきた町であっても、約二〇〇戸に及ぶこの未解放部落は、木材とは、直接関係がなかった。いや、木材からは、はねのけられていたという方が正しいかもしれない。過去においても、今日においてもそうである。約二〇〇戸中からただ一人が、××パルプの労働者になっているにすぎない。

## (2) 部落のすがた

新宮の木材は、二七年より二九年になるにしたがって、六、七〇%に減少している。いかにによって新宮に集められた「吉野林業地帯」の木材は、戦後、急速に、トラックによって、奈良県の五条、桜井等に集中されている。ここに、今日の新宮の姿があり、かつて、「関西の江戸っ子」といわれた、この人々の運命がある。

二九年度	素材	一三、三九八石
	製材	一五三、〇三三石
二八年度	素材	二四、一三四石
	製材	三〇〇、〇〇〇石
二七年度	素材	三一、五一六石
	製材	三五八、〇五五石

然ではない。新宮は、木材によって生まれ、木材によって栄えてきた。だが、いまはどうであろうか。熊野川が太平洋にそそぐ河口にある「熊野橋」に立って、このあたりを見渡せば、かつて、この河の兩岸にあふれていた、といういかだは、いま、三々五々、岸辺につながれているにすぎない。熊野川をさかのぼり、熊野三山の一つである本宮や湍八丁と結ぶプロペラ船とゆきちがういかだの数も、時々、思い出したほどしかない。たしかに、木材の運搬が戦後、いかによりトラックに代わったこともある。しかし、理由は、ただそれだけではなさそうである。『紀南新聞』(三〇・二・二〇)は、新宮に集まる木材の少なくなったことを憂えながら、次のような数字を報道している。

村や部落を形造っている人間関係を明らかにすることは、けっしてむずかしくはない。子どもたちの生活経験も、彼らの口をついて出てくるもの以上に、それを正しく知り、その上にあたって教育を前進させてゆくことができる。教育活動の部門でなされる実態調査は、子どもたちをいっそう前進させるために、彼らのなまの言葉を基盤にし、教師と子どもと父兄とが固く結合された中でこそすすめられるのではなからうか。国民教育の分野でなされる調査は、学術研究や行政や、あるいはまた、解放運動等の調査とは、自らその方法もちがったものではなからうか。

(一九五六年「教育調査の理論と展開」)

## 二 同和教育のゆきづまりは何か

——新宮の調査から学ぶこと——

## 1 新宮と部落

## (1) 新宮と「いっしょ」

新宮は、紀伊半島の南端串本に隣りし、熊野川一つへだてて三重県と境している。「熊野川」「吉野三山」、その名で、湍八丁を思い、平家の昔をしのぶ人も少なくないであろうが、今日の新宮は、何といっても木材をぬきにしては考えられない。

新宮は、木材の町である。かつて、この地方の人々をして、「関西の江戸っ子」と呼ばせたものも、新宮に集まった木材からであった。新宮は、関西における木材の一大集積地として、関東の深川と匹敵していた。

朝鮮と満州との境を流れる鴨緑江と吉野川とを結びつけたのも、木材であった。奈良県の「十津川林業地帯」からはじまって、三重、和歌山の山林地帯を流す熊野川のいかに師たちは、遠く鴨緑江までいかに流しに遠征している。いかに師がいかに流しながら歌う熊野川の歌と「鴨緑江ぶし」のふしまわしと同じであるのも、けっして偶

次節「部落のすがた」では、最初の文中に「約二〇〇戸に及ぶここの未解放部落は、木材とは、直接関係がなかった。いや、木材からは、はねのけられていたという方が正しいかもしれない」とされ、「新宮市に集まる木材の減少は、山林労働者、いかだ師の仕事を極度にきりつめ、そこからあふれた労働者が、これまで部落の主業であった土木労働にくいこんできた」と要点を突いた説明がされているため、一見すると、文章をこの節から始めても文脈は成り立つ。

つまり、中村が「前途の暗い新宮」を冒頭の節で書いたことは、文章を書き出しからやや重くしている（以上、中村、1973年、93-109頁）。そこには、被差別部落を含む新宮市全体に将来への展望が見えないのだから、ただ解放運動に結集しさえすればよいという単純化された結論に満足するわけにはいかないという中村のメッセージが込められているように思われる。

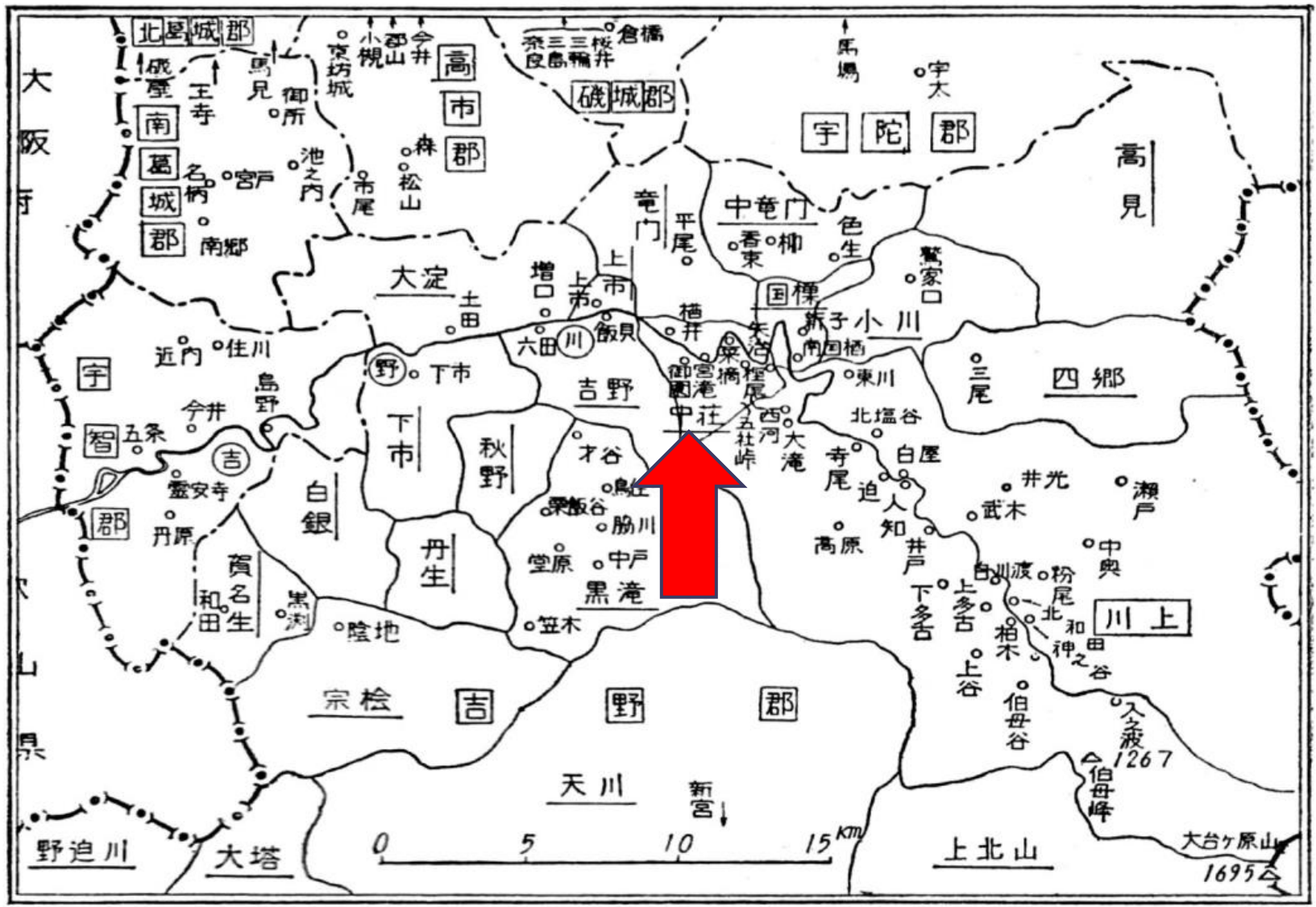
## b. 教員として赴任した奈良県吉野郡の実情



<https://minkara.carview.co.jp/userid/1995869/blog/c923332/>  
(2018/10/25確認)



# 奈良県吉野川流域図



(笠井, 1964年, 203 頁)

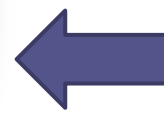
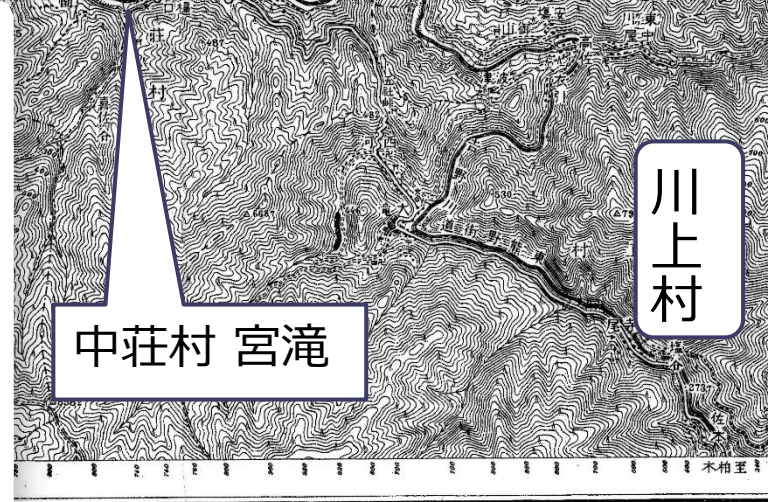
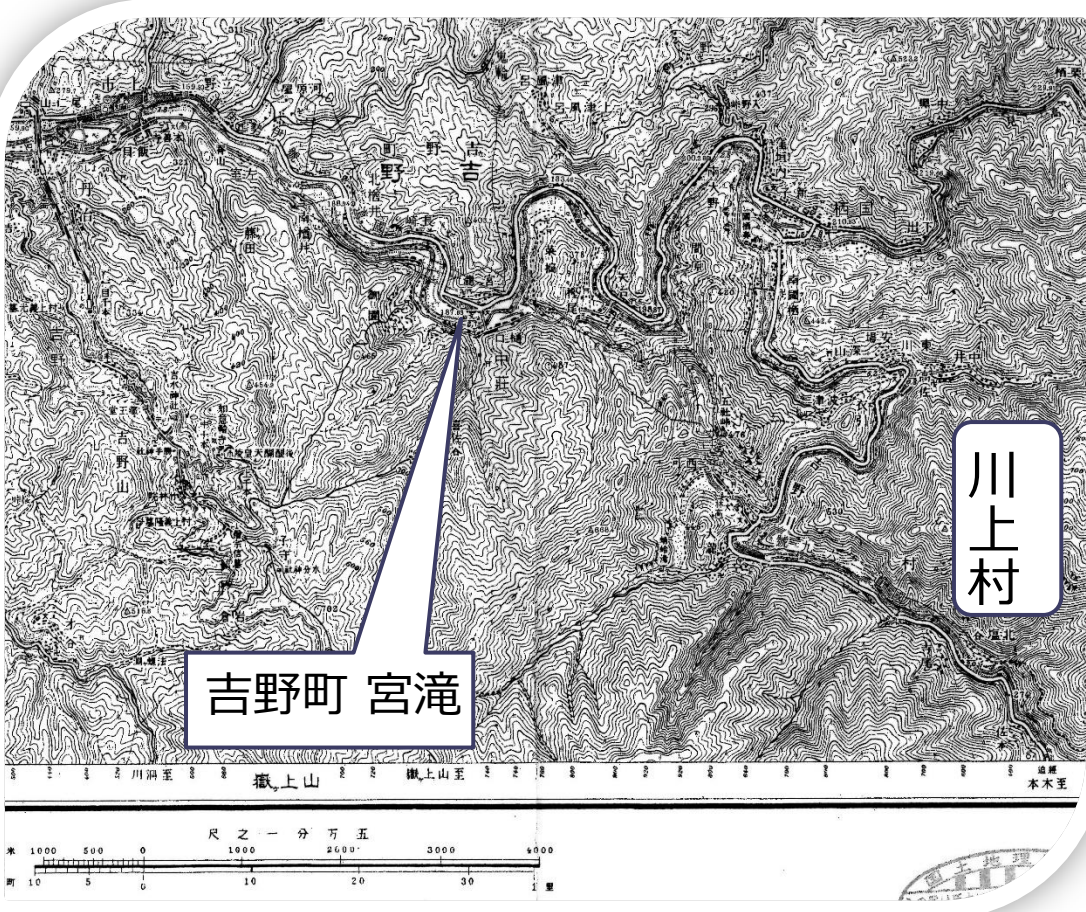
12/2018 OKAMOTO H

中村ら部落問題研究所員が新宮市で調査を行った直後、同研究所内では日本共産党員登録をしていた者と、そうでない中村らとの間に確執が生じた（平野，2002年12月，65-66頁）。彼は研究所を去り、同じ1955（昭和30）年の11月から奈良県吉野郡中荘村宮滝の中荘小学校で教壇に立った（翌年に中荘村は吉野町に合併される）。

このころは、紀伊半島木材の取引の場について、桜井市場（奈良県桜井・橿原・天理市）が新宮市場に対して圧倒的な優位を占めるに至ったばかりでなく、木材の運搬手段はトラックとなり、従来の筏流しは完全にすたれたところである。

当時の中荘村は戸数440，人口2,270で、農家は耕地面積が小さいため農業だけでは生活ができず、林業労働（出稼ぎを含む）、箸や木箱製造の家内工業、日雇労働の副業をし、中間層以上は給料生活化していた。中学校卒業後、村に留まる者は少なかった。一方で10名内外の山林地主・素材業者は数億単位の資産を有していた（大藪，1957年8月，112-115頁）

(大日本帝国陸地測量部, 1913年)



(国土地理院, 1960年)

中荘小の校区に被差別部落はなかったが、そこは貧しい家庭の多い山村であった（中村，1975年，464頁）。教室内はケンカが絶えず、一方で元気がない子どももいる。毎日家庭訪問をして保護者とコミュニケーションをとるなかで、「問題はやはり彼らの生活そのものにある。〔中略〕加えて、親たちの性格、意識にまでも関係している」（同書，30頁）と気づいた中村は、生活綴方を採り入れる。彼は、家庭の様子も含めて子どもたちに日記を書かせ、そのわずかな一言にもコメントを書き、また家庭訪問を頻繁に行った。

ところで、中荘村に隣接する吉野川上流の川上村では、川上村山林労働組合が労働市場の変化に対応して、道路工事への組合員就労や函館営林署国有林への労働力移出等を行って組合員の生活を守るよう努めたほか、争議をも頻発させていた。組合員数は1954（昭和29）年以後増加しつつあり、やがて1958（昭和33）年にピークを迎えることになる（半田良一・山田良治，1979年，139，147-148頁）。

貧しく沈滞した中荘村と、労組が懸命に動いて村在住の労働者の生活を守ろうとした川上村の様子は、あまりにも対照的である。なぜこのように異なっていたのか？

時期をさかのぼって吉野川の筏流しが盛んであったころ、多くの筏が中荘村域を通過していったなかで、山林王と呼ばれた北村家の筏は、奥郷（吉野川本支流の最上流をいう）から中荘村宮滝まで来るといったんそこに係留されたのち、下流の上市から来て交代した筏師が再び和歌山方面に流して行った（谷，1972年，515頁）。

つまり宮滝の地は、北村家の筏師の中継地として、金遣いが荒かった彼らが上得意として金を落とす土地であった。



①は中村が勤務していた中荘小。現在は廃止され、吉野宮滝野外学校となっている。

12/2018 OKAMOTO H



吉野宮滝野外学校の眼下を流れる吉野川。この上流と下流すぐの所に難所があるため、ここしか筏を係留できる所はないと思われる。2018/10/21岡本撮影

12/2018 OKAMOTO H

上得意の筏師を失った宮滝の住民たちは、北村家と労使関係になく、生活を守ろうにも闘いようがなかった。また中荘村民の中の山林労働者は、「山林労働のチャンスを有力者に依存せざるを得ない」立場で、飯場を組んで他府県にまで出稼ぎに行く生活をしており（大藪，1957年8月，114，144頁），組織的に労働運動を展開できた川上村の山林労働者とは異なっていた。

中村が赴任したのはこうして寂れてしまった中荘村であり，彼はこのように絶望的な状況におかれた住民と子どもたちを前にして，生活綴方と家庭訪問を軸とする孤軍奮闘の教育実践を展開したのである。



吉野宮滝野外学校  
（旧・中荘小）  
2018/10/21岡本撮  
影

#### 4. おわりに —普遍性と教養—

本研究においては、中村拡三が提唱した「解放の学力」論は、彼が1955（昭和30）年に和歌山県新宮市で行った被差別部落の調査と、奈良県吉野郡における教員生活に影響されて形成されたのではないか、という問いを立てた。

その結果、日本が高度成長に向かうなかで、筏流しからトラック輸送へと木材運搬方法が変わるにつれ、まず新宮市では、生じた失業者が職を求めて被差別部落住民の生業を脅かし、次に吉野郡中荘村では、顧客たる筏師を失って経済的困窮に陥っており、その2地域を中村が相次いで見つめる立場にいたことを見出せた。



このころは、1956（昭和31）年の『経済白書』冒頭で「もはや戦後ではない」と書かれたほどに戦後復興が進んだ時期であったが、2地域はこの動きから取り残されており、明るい将来展望を描けなかった。したがって大人も子どもも、生きる道を求めて地域から出て行かねばならない可能性が高かった。

ここから、中村が追求した子ども像は、自分の生活と社会の姿を正しく見つめ、社会に働きかける運動をする人間ではあっても、それは地域における基盤の存在を前提とするものではなく、いかなる場所、いかなる環境に置かれてもそれをできる人間だったのではないか（この点は、後の大阪府松原市などの同和・解放教育とはカラーが異なるように思われる）。

また、中村の「解放の学力」3ポイントのうち、

- (1)生活綴方的教育によって子どもたちに生活実態を見つめさせ、そこから社会矛盾に気づかせる（解放の自覚）。
- (2)狭い個人・人間関係レベルの問題を、広い社会関係の問題へとつなぐ意味で「社会関係のあり方や自然の法則を身につける教育」を行う（教科指導）。

の2点については、単に子どもが高い学力を修得すればよいというものではなく、広い知識を身につけて、そこから社会・自然の現状と自分の位置を理解するものであるから、一種の初等(中等)教育版教養教育ということが出来る。それゆえ必然的に、教える者にはもちろんのこと、学ぶ者にも、能力に応じた幅広い教養が要求されることになる。

このように、中村がいう「解放の学力」は、教養と不可分である。その背景には、ファシズム期にさえも「哲学を勉強しなければ一人前の教員ではない、というような気風があった」（赤羽，1974年，48頁）という長野県で彼が生まれ育ち、師範学校で学び、最初に教員生活を送ったこと、および部落問題研究所で奈良本辰也，原田伴彦，山岡亮一，上田一雄，領家穰らから、歴史学，農業経済学，社会学の研究訓練を受け、あるいは親しく交わり、そうして教養を積んだことが関係していると思われる。

## 5. 今後の課題

中荘小を去った中村は、同じ奈良県の北葛城郡河合町立河合小（現・河合第一小）に移る。そこで部落問題に熱心に取り組む隣町の同郡上牧町立上牧小校長・松浦勇太郎と意気投合する。1960（昭和35）年に同和教育副読本『なかま』の発行にこぎつけたところに京都市に移り、市立有済小、明德小で教育実践に励む。

本発表者が解釈した、「いかなる場所、いかなる環境でも自分の生活と社会の姿を正しく見つめ、社会に働きかける子どもをつくる教養教育」という中村の考えは、そのなかでどのようになっていくかを今後見ていきたい。

## 引用・参考文献

- 赤羽七郎治（1974年）「教員生活断章」，『塩筑教育』第3号，東筑摩塩尻教育会，47-50頁，塩尻市立図書館蔵。
- 板山勝樹（2013年）「中村拡三の『解放の学力』論成立に関する一考察」，『部落解放研究』，部落解放・人権研究所，第199号，85-96頁。
- 上原善広（2014年）『差別と教育と私』，文藝春秋。
- 大藪輝雄（1957年8月）「部落有林野解体の一局面—奈良県吉野郡旧中荘村の場合—」，『立命館経済學』第6巻第3号，立命館大学経済学会，109-145頁。
- 笠井恭悦（1964年）『近代土地制度史研究叢書第三巻 林野制度の発展と山村経済』，御茶の水書房。
- 国土地理院（1960年）『[地形図] 吉野山』，同院，1908年測量，1922年修正測量，1957年要部修正測量。
- 大日本帝国陸地測量部（1913年）『[地形図] 吉野山』，同部，1908年測量。
- 谷弥兵衛（1972年）「筏流しについて」，吉野町史編集委員会編（1972年），514-521頁。
- 中村拡三（1973年）『解放教育著作集第3巻 解放教育と集団主義』，明治図書出版。
- （1975年）『解放教育著作集第1巻 部落解放と教育実践』，同社。

- 半田良一編著（1979年）『日本の林業問題—紀伊半島における林業の展開構造—』，ミネルヴァ書房。
- ・山田良治（1979年）「吉野林業における労働問題」，半田良一編著（1979年），132-157頁。
- 平野一郎（2002年12月）「中村かくさんのこと（私記）」，解放教育研究所編『解放教育』第420号，明治図書出版，65-67頁。
- 吉野町史編集委員会編（1972年）『吉野町史上巻』，吉野町役場。